

富山県井口村

井口 A 遺跡発掘調査報告

2002. 3

井口村教育委員会

序

富山県西部の砺波平野の扇のかなめ部分にあり、面積11.50km²の井口村は、水田単作地帯で、遺跡の多いところです。特に、これまでに井口遺跡（縄文後期の標識遺跡）、井口城跡（中世平城）、蛇喰正覚寺遺跡（中世集落跡）など著名な遺跡が知られています。一方、最近の開発事業等に伴い村内全域で分布調査を行っており、新たな遺跡が多々みつかりつつあるところです。

今回、県営担い手育成基盤整備事業（蛇喰地区）の実施に伴い、井口A遺跡の発掘調査を実施しました。同事業においては、盛土工法によって遺跡を保護、保存することを基本としていますが、水田の一部は発掘調査を実施することになりました。

調査の結果、井口城跡と同じ時代に営まれた村跡が見つかりました。ここからは、茶焼きの皿、珠洲焼の壺・すり鉢・漆碗・石臼などが出土し、当時の生活の一端をうかがい知ることが出来ました。本書は、その調査結果をまとめたものであり、文化財への理解を深めていただき、郷土の歴史の解明や学術研究等に活用していただければ幸いです。

最後にこの発掘調査にあたり、多人のご協力を賜りました富山県埋蔵文化財センター、富山県農林水産部各課、同砺波農地林務事務所、井口村シルバー人材センター、県営担い手育成基盤整備事業蛇喰地区委員会を始め、地元の方々に深く感謝申し上げます。

平成14年3月

井口村教育委員会

教育長 小林敏夫

例 言

1. 本書は平成13年度に行った富山県東砺波郡井口村蛇喰に所在する井口A遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は県営担い手育成基盤事業（区画整理型）蛇喰地区に先立ち、農家負担分については国庫補助金・県費補助金を受け、調査員は富山県埋蔵文化財センターからの派遣を受け、井口村教育委員会が実施した。
3. 調査事務局は井口村教育委員会内に置き、教育課長 池田 隆司が担当した。
4. 調査に関するすべての資料は富山県埋蔵文化財センターで保管している。なお、遺跡の略記号は村名と遺跡名の頭文字（Inokutimura-Ino Kuti-A）から「IIK-A」とした。

5. 調査担当者及び調査面積・期間は以下のとおりである。

・ 試掘調査	富山県埋蔵文化財センター 調査課	文化財保護主事	高橋 真実
・ 対象面積	1,400㎡		
・ 調査期間	平成13年3月30日		
・ 本調査担当者	富山県埋蔵文化財センター 調査課	主 任	高梨 清志
	同（併任 砺波市教育委員会）	主 事	野原 大輔
・ 調査面積	1,200㎡		
・ 調査期間	平成13年9月18日～同年11月12日（述べ34日間）		

6. 本書の執筆および図版の作成は、富山県埋蔵文化財センターの職員の協力を得て調査担当者がこれに当たった。
7. 本書で使用した遺構の略記号は以下のとおりである。ただし、遺構検出時に略記号を付しているため結果として遺構の性格と略記号が一致しないものがあるが、あえて変更はしていない。
土坑-SK、溝-SD、井戸-SE、柱穴・小穴-SP

9. 調査グリッドは公共座標第Ⅱ系を用いた。調査グリッドの基点（ $X=0$ ・ $Y=0$ ）は公共座標の $X=59,540$ ・ $Y=-20,970$ である。標高は海拔高である。

10. 図中の土壌色名は農林水産技術監修「新版標準土色帳」に準じている。

・ 第1章中の地形分類の範囲とその名称は「土地分類基本調査」【富山県：1980】を参考とし、地形的な用語は鈴木隆介氏〔鈴木：1997〕の区分を用いている。

11. 遺物整理作業員

藤井 栄孝・高田 朗

12. 現地調査及び遺物整理にあたって下記の方々・機関から多大なご教示・ご協力を得た。記して謝意を表する。

富山県砺波農地林務事務所・井口村蛇喰地区土地区画整理組合・井口村シルバー人材センター

本文目次

序

例言

目次

はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
(1) 分布調査	
(2) 試掘調査	
(3) 井口A遺跡の過去の調査	
1章 遺跡の地理的・歴史的環境	2
1. 周辺地域の地理的・歴史的環境	2
2章 調査の成果	5
1. 調査の方法と調査経過	5
(1) 調査計画の策定	
(2) 現地調査	
(3) 遺物整理	
2. 調査区周辺の微地形及び基本層序	5
3. 遺構	9
(1) 土坑	
(2) 井戸	
(3) その他の遺構 小穴	
(4) 旧河道	
4. 遺物	18
(1) 中世土師器	
(2) 珠洲	
(3) 石製品	
(4) 木製品	
3章 まとめ	
1. 遺構	25
2. 遺物	25
3. 遺跡の推移と周辺の遺跡との関係	26
引用・参考文献	26

表 目 次

表1 周辺の遺跡

表3 小穴観察表

表2 井戸観察表

表4 遺物観察表

挿 図 目 次

図1 遺跡分布図

図9 遺構図(5)

図2 調査区周辺の地形

図10 遺構図(6)

図3 調査グリッド図

図11 遺構図(7)

図4 基本順序

図12 遺物実測図(1)

図5 遺構概略図・遺構図(1)・旧河道

図13 遺物実測図(2)

図6 遺構図(2)

図14 遺物実測図(3)

図7 遺構図(3)

図15 遺物実測図(4)

図8 遺構図(4)

写 真 図 版

図版1 作業風景

図版8 遺構(2)

図版2 航空写真(平成8年)

図版9 遺構(3)

図版3 航空写真(昭和22年)

図版10 遺構(4)

図版4 調査区近景

図版11 出土遺物(1)

図版5 調査区全景

図版12 出土遺物(2)

図版6 遺構集中区

図版13 出土遺物(3)

図版7 遺構(1)

図版14 出土遺物(4)

はじめに

1. 調査に至る経緯

井口村では大型農業に対応するため同村蛇喰地区に「蛇喰地区区営担い手育成基盤整備事業（区画整理型）」の施工申請を平成7年12月に富山県へ提出し、翌平成8年5月に事業計画が策定された。その内容は平成8年度～平成12年度の5ヶ年で蛇喰地区の60haを対象としては場整備事業を行うというものであった。

(1) 分布調査

事業対象地には周知の埋蔵文化財包蔵地が存在していた。また、この地区では詳細な分布調査が行われておらず新たな埋蔵文化財包蔵地の発見および範囲拡大の可能性が高いと判断されたため、村教育委員会では事業地内における分布調査を計画した。分布調査は原埋蔵文化財センターの調査協力を得て平成7年11月から12月にかけて5日間実施した。その結果、新たに3遺跡（蛇喰A遺跡・蛇喰B遺跡・蛇喰C遺跡）と、1遺跡（蛇喰正覚寺遺跡）の範囲拡大を含む計8遺跡の存在が確認され、その面積は全体の90%となる54haであった。

(2) 試掘調査

試掘調査は国庫補助金を受け、原埋蔵文化財センターの調査協力を得て、平成8年度～11年度にかけて実施した。現地調査の延日数は88日間で試掘調査対象面積の4.9%を掘削した。県砺波農地林務事務所、県埋蔵文化財センター、井口村教育委員会の三者で協議を行った結果、遺跡が確認された箇所は事業計画を変更し盛土保存することとしたため、遺跡の大半は水田下に盛土保存されることになった。なお、この試掘調査では幾つかの新しい試みがなされた。分布調査の結果、埋蔵文化財包蔵地が事業地の大半を占めたことで農地林務事務所から、より精度の高い試掘調査の実施要望を出された。これを受け、文化財保護サイドは試掘調査方法の再検討を行った。平成9年度からは測量の専門業者を導入し、全試掘トレンチにおいて、精度の高い位置測定ならびに遺跡保存高の標高をセンチ単位で示すことで、精度の高い田面調整を可能とした。また、これに伴い事業途中での遺跡保存高の保守状況の確認を行うこととした。これにより、事業中の遺跡管理を確実にする体制を整えた〔井口村教委：2000〕。

今回の本調査対象地は平成12年3月30日に試掘調査を行い、1,200㎡で遺跡の広がりを確認したものである。調査対象地は井口A遺跡の中央東端に当り、主に中世を主体とする遺構を確認した。この試掘調査では調査対象地の東端に南から北流する旧河道が確認されており、井口A遺跡はこの河道を東端とすると考えられる。この報告を受け、先に述べた三者で協議をもったが、この箇所に関しては事業計画の変更は困難であるとの結論に達し、平成13年度に記録保存を行うことで合意した。

(3) 井口A遺跡の過去の調査

井口A遺跡は昭和59年（1984年）のほ場整備事業に先だつ分布調査で発見された遺跡である。この調査では8ヶ所で主に縄文土器や中世の陶磁器が確認されている。この分布調査をもとに昭和59年度に2回の試掘調査を実施し、この内5ヶ所で中世の遺物包含層や遺構を確認した。出土した遺物は珠洲・中世上師器・輸入陶磁器・唐津・伊万里系磁器・宋銭・木器などがあり、これらの遺物により井口A遺跡の存続時期は14世紀～17世紀以降と推定された。しかし、この周辺はすでに昭和27年および40年に耕地整理が行われており、遺跡の中心となっていたと思われる自然堤防上の微高地部分が削平されており、遺構の広がりや中心となる部分などは十分に捉えられていない。なお、先に触れた遺物包含層や遺構等が確認された5ヶ所については事業計画の見直しを行い盛土保存されている。その後、平成7年度に1回、平成8年度に2回の試掘調査が行われているが、このときの調査では遺構および遺物の広がりには確認されていない。

1章 遺跡の地理的・歴史的環境

富山県は東・西・南に山地をひかえ、北には平野部が広がり富山湾に面している。南の飛越泉境の山地は北へ伸びるに従い標高を下げて射水丘陵、さらにその一端は北東へ延びて呉羽山丘陵となり、地理的・文化的に富山県を呉西と呉東に二分している。呉西の平野は射水・永見平野の海成堆積低地と小矢部川・庄川扇状地などの河成堆積低地である扇状平野に細分される。ここでは井口A遺跡が所在する南扇複合扇状地を中心として、小矢部川支流の山田川ならびに東に広がる庄川新扇状地について地形的な特徴を概観したあと、歴史的環境について述べる。

南扇複合扇状地は高清水山地を浸食した赤祖父川・千谷川・西大谷川・東大谷川などの小河川が形成した複合扇状地帯である。遺跡が位置する赤祖父川扇状地は山田川が左扇端部を浸食し、比高差約10mの浸食崖が発達している。

庄川は扇状平野を形成した河川で、岐阜県にその源を発し流長132kmを測る。現河道は富山県に入り標高120mの庄川町吉岡付近を扇頂として半径約14kmの新扇状地を形成し、標高15~30m付近で蛇行原に入り日本海へ注ぐ。この新扇状地は縄文時代前期の縄文海進がきっかけとなり発達した。これにより小矢部川は北西の山麓に押しやられ、現在は庄川の排水河川として機能している。庄川が現河道に移行したのは比較的新しく16世紀末の天正地震によると言われている。南扇複合扇状地との境には段丘崖が発達し、庄川市街地から西方の井波町野能原付近まで見られる。

次に周辺地域に所在する遺跡立地について概観する。南扇複合扇状地における最も古い遺跡は縄文時代中期の庄川町松原遺跡(37)であるがこの時期の遺跡は少ない。縄文時代後期になると井口(4)・池尻(13)・蛇喰正覚寺(20)・蛇喰C遺跡(28)などの遺跡が増える。弥生・古墳時代の遺跡は数少なく、久保・池田No.3遺跡(7)で遺物の出土が見られた程度である。この地区で遺跡が増えるのは開発が促進された古代に入ってからで、井口遺跡・井口城跡(4)・池尻遺跡(13)・高瀬遺跡(33)などが営まれる。中世になると井口城(12)が築城される。井口A遺跡(1)が営まれるのもこの時期である。城跡も数多く造られるようになり、中世全般を通して遺跡が多く営まれるようになる。

山田川左岸段丘では縄文時代中期の徳成(56)・徳成Ⅱ(55)・東城遺跡(54)などの遺跡群が多数存在し、弥生・古墳時代では若干遺跡数が減少するものの、古代〔在房遺跡(45)〕・中世〔梅原胡摩堂(50)・田尻遺跡(43)〕と大集落が形成されている。

庄川新扇状地では遺跡数は他と比較して極端に少ない。南扇複合扇状地では古代以降、遺跡数が増加するが新扇状地では全く見られない。図1でも遺跡の空白域となっており、これは庄川の影響によるものと考えられる。

No.	遺跡名	種別	時代	遺跡番号	備考	年代
1	井口A遺跡	407001	縄文時代中期	30	30	縄文時代中期
2	井口B遺跡	407002	縄文時代中期	31	31	縄文時代中期
3	井口C遺跡	407003	縄文時代中期	32	32	縄文時代中期
4	井口D遺跡	407004	縄文時代中期	33	33	縄文時代中期
5	井口E遺跡	407005	縄文時代中期	34	34	縄文時代中期
6	井口F遺跡	407006	縄文時代中期	35	35	縄文時代中期
7	久保・池田No.3遺跡	407007	縄文時代中期	36	36	縄文時代中期
8	久保・池田No.4遺跡	407008	縄文時代中期	37	37	縄文時代中期
9	久保・池田No.5遺跡	407009	縄文時代中期	38	38	縄文時代中期
10	久保・池田No.6遺跡	407010	縄文時代中期	39	39	縄文時代中期
11	久保・池田No.7遺跡	407011	縄文時代中期	40	40	縄文時代中期
12	井口城跡	407012	縄文時代中期	41	41	縄文時代中期
13	池尻遺跡	407013	縄文時代中期	42	42	縄文時代中期
14	山田川左岸段丘	407014	縄文時代中期	43	43	縄文時代中期
15	庄川新扇状地	407015	縄文時代中期	44	44	縄文時代中期
16	庄川新扇状地	407016	縄文時代中期	45	45	縄文時代中期
17	庄川新扇状地	407017	縄文時代中期	46	46	縄文時代中期
18	庄川新扇状地	407018	縄文時代中期	47	47	縄文時代中期
19	庄川新扇状地	407019	縄文時代中期	48	48	縄文時代中期
20	庄川新扇状地	407020	縄文時代中期	49	49	縄文時代中期
21	庄川新扇状地	407021	縄文時代中期	50	50	縄文時代中期
22	庄川新扇状地	407022	縄文時代中期	51	51	縄文時代中期
23	庄川新扇状地	407023	縄文時代中期	52	52	縄文時代中期
24	庄川新扇状地	407024	縄文時代中期	53	53	縄文時代中期
25	庄川新扇状地	407025	縄文時代中期	54	54	縄文時代中期
26	庄川新扇状地	407026	縄文時代中期	55	55	縄文時代中期
27	庄川新扇状地	407027	縄文時代中期	56	56	縄文時代中期
28	庄川新扇状地	407028	縄文時代中期	57	57	縄文時代中期
29	庄川新扇状地	407029	縄文時代中期	58	58	縄文時代中期

表1 周辺の遺跡

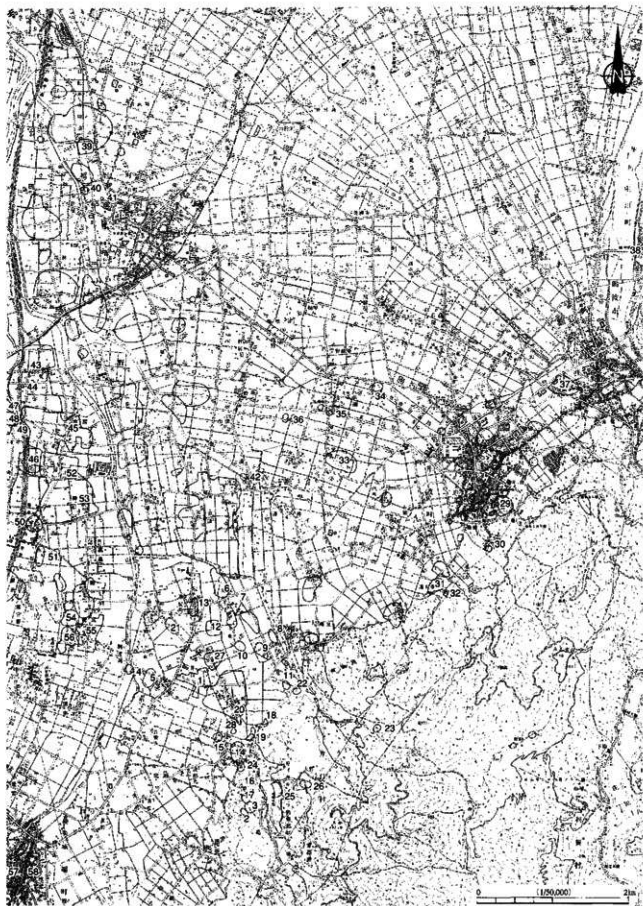


図1 遺跡分布図 (1/50,000)

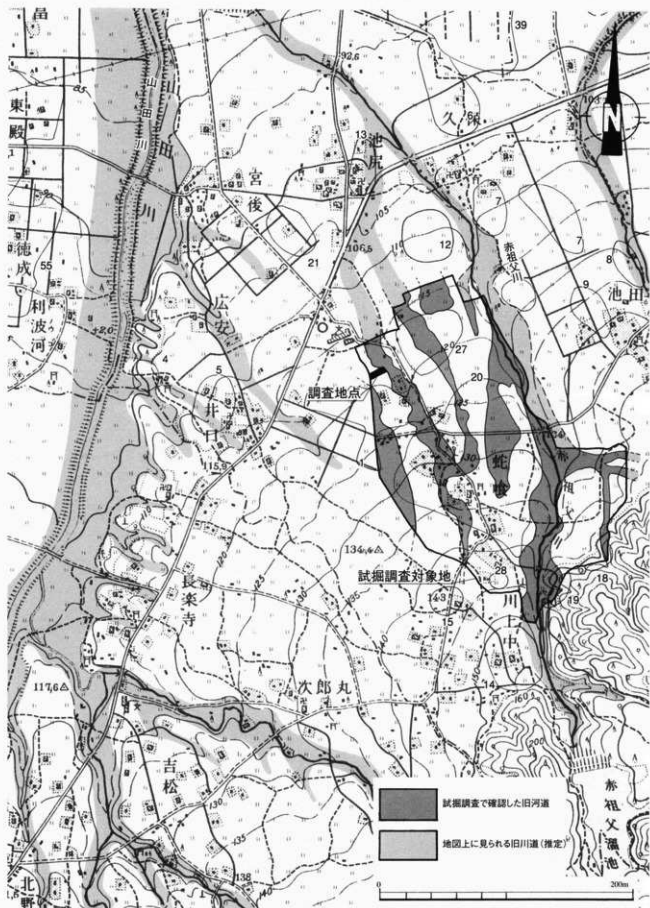


図2 調査区周辺の地形 (1/25,000) この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分1地形図を複製したものである。
(承認番号) 平13北復、第325号

2章 調査の成果

1. 調査方法と調査経過

(1) 調査計画の策定

調査グリッドは公共座標第Ⅱ系を用い、南北方向をX軸、東西方向をY軸と定め、2m四方を1単位とし10m毎に基準杭を打設した。調査計画は試掘トレンチ内での包含層厚・遺構密度を計測して掘削土量を推定し「富山県埋蔵文化財発掘調査基準」に基づき各工程毎の調査期間・必要人員を算出して調査体制を決定した。

(2) 現地調査

現地調査は通常の手順（表土・耕作土除去、包含層の発掘、遺構確認面の精査・遺構検出、遺構発掘、遺構の記録、写真撮影、空中写真測量、補足作業）で行った。ただし、平面プランが小規模な遺構に関しては次の調査方法を取った。空中写真測量は平向プランの記録に留め、その後遺構断割りを行い断面観察・図化を行っている。これは遺構の遺存状況によっては掘削深度が深くなり遺構下部の掘削・断面観察作業及び、記録写真の撮影が困難とならないようにするためである。断割り作業は遺構の平面プランを精査し、柱根と思われる痕跡がある場合はその中央を、痕跡が何もない場合は遺構の中央部をとるように設定した。断割方向は写真撮影を考慮して北側以外を断割った。この詳細は「3. 遺構 (3) その他の遺構小穴」の項で述べている。また、掘削深度が50cmを超えたものは井戸状遺構と判断し、人力での掘削作業が危険であるため現地調査の最後に重機で断割り作業を行った。

(3) 遺物整理

現地調査と平行して調査事務所では整理作業員1名が遺物の水洗・注記作業を行った。調査終了後、埋蔵文化財センターで担当者・整理作業員1名で調査報告書の作成を行った。

2. 調査区周辺の微地形および基本層序

今回の調査区の地形は、先の遺跡立地で述べたように、南砺複合扇状地の一角を占める赤根父川扇状地の扇尖部に位置している。山田川は赤根父川扇状地の西端を浸食しながら北流し、侵食崖を形成している。この侵食崖に沿って扇状地からは流路跡が幾筋も伸び、複雑な地形を形成している。縄文時代後期の指標遺跡である井口遺跡(4)もこの侵食崖に面して位置しており、流路跡に挟まれ舌状に伸びた微高地の先端部に集落が位置している。試掘調査では地表面からは判断できない赤根父川の旧流路を確認している。また、確認された遺構も旧流路を避け、微高地上に分布すると報告されてい



図3 調査対象地 グリッド図 (1/2,500)

る。

今回の本調査対象地の地形は南が高く北に向かい低くなっている。東西方向は西側が高く、東側には先述した旧河道が北流している。過去のは場整備で西側を中心としてはほぼ全域が削平を受けている。このことは調査区と南接する道路との比高差で推測される。調査区東端では比高差は無いが、西に向かって比高差を増し、西端では道路との比高差は約1.5mを測る。

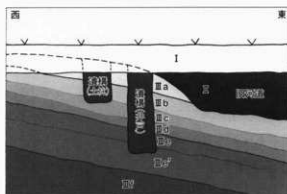
基本層序はその性格によりⅠ・Ⅱ・Ⅲ層に分けた。Ⅰ層が褐灰色土で耕作土およびは場整備時の盛土で厚さ約20～60cmを測る。Ⅱ層との層界は明瞭で堆積の連続性は無い。

Ⅱ層は黒褐色シルトで旧河道覆土である。この層は試掘調査〔井口村教委：2000〕では赤祖父川扇状地が形成され安定化した後に土壌化していった有機質層と報告されており、以前は調査区全域を覆っていたと考えられる。このことは今回の調査で確認した遺構覆土もこの層を基本としていることから何える。その後、耕地整理により削平を受けたため今回の調査では旧河道付近でしか確認出来なかったと考えられる。Ⅲ層との層界はやや明瞭で、漸移層は発達していないが堆積の連続性は何える。

Ⅲ層はいわゆる地山で扇状地の形成層である。遺構確認面はこの層であるが、これは上部のⅡ層が削平された結果である。土色・質の違いにより6種類に細分した。a～f層はシルト・粘質土と礫層の互層をなしており、各層界は不明瞭で堆積の連続性が何える。b・c・d層は局部的に堆積しており、扇状地の発達過程を示している。また、調査区西部ではa層は確認できず、表土直下でb・c・d層が見られた。このことは先に触れた耕地整理時の削平を示すものである。e層は下部がグライ化しており、この層で若干の湧水が見られる。f層では鉄分の発達を確認されておりこの層が湧水層と考えられる。井戸などの遺構もこれらの層に達するまで掘削されている。

現地調査 日誌

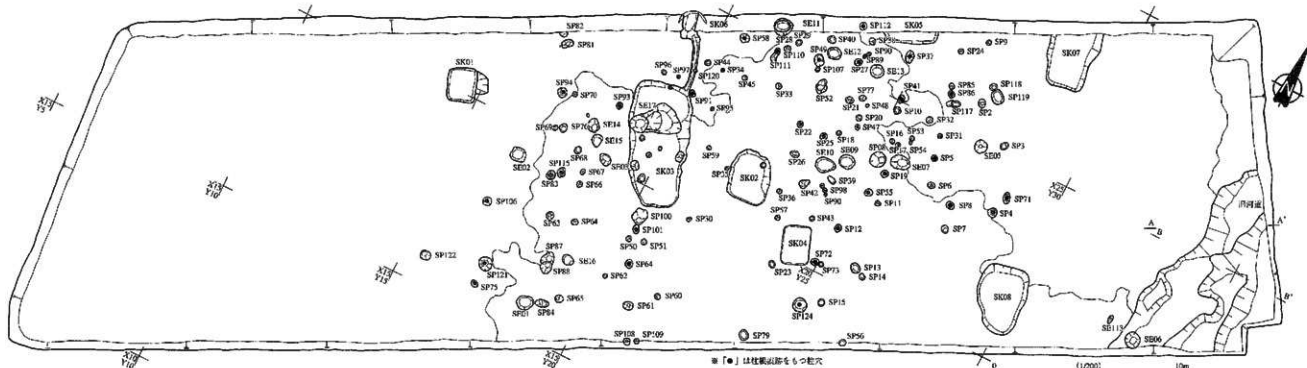
- 9/18 表土除去〔4日間〕
- 9/25 発掘調査開始（作業員投入）安全対策
- 9/26 杭打ち〔2日間〕
- 10/2 遺構検出開始〔6日間〕
- 10/10 遺構掘削開始〔6日間〕
- 10/23 写真撮影
- 10/29 航空測量
- 10/30 残務処理（小穴断割り）〔5日間〕
- 11/1 井口中学校1年生現場見学
- 11/7 残務処理（井戸断割り）〔3日間〕
- 11/9 井口村村長視察
井口小学校・中学校で遺跡説明会開催
- 11/12 器材撤収・現地調査終了



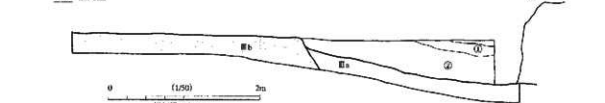
Ⅰ層	褐灰色土 10YR4/1 層界は不明瞭 耕作土及びは場整備時の盛土	遺構
Ⅱ層	黒褐色シルト〔遺物包含層〕 10YR3/3 層界は不明瞭 全調査区にわたって分布し、遺物を含む。この層で堆積している。主に、黄褐色礫質シルト～礫〔地山〕	
Ⅱa層	明黄褐色礫層〔地山〕 10YR6/6 層界は不明瞭	
Ⅱb層	明黄褐色シルト～粘質土〔地山〕 10YR6/6 層界は不明瞭	
Ⅱc層	オリーブ褐色シルト～粘質土〔地山〕 2.5Y4/4 層界は不明瞭	
Ⅱd層	黄褐色シルト～粘質土〔地山〕 10YR5/8 層界は不明瞭	
Ⅱe層	明黄褐色シルト～礫層〔地山〕湧水層 10YR7/4 層界はやや明瞭 湧水層 この層の下部はグライ化して黄褐色となる。下部から湧水が見られる。	
Ⅱf層	明黄褐色シルト〔地山〕湧水層 10YR6/4 層界はやや明瞭	

※層界の記述は直下の層との層界の状態を示した。

図4 基本層序



■「□」は遺構跡をもつ穴
 L=119.30m
 A 旧河道
 平面図スケール



旧河道
 1. 土色シルト (10Y R 2/1) 断面は平坦
 2. 黒色シルト (10Y B 2/2) 断面は不均整
 3. 黒色粘土土 (5Y 2/1) 断面は小円筒



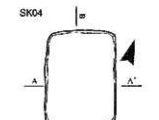
SK05
 1. 紀及明製
 2. 土色シルト (10Y R 2/1) 断面は中円筒部30cmシフト状に含む
 3. 黒色シルト (10Y B 2/1) 断面は中円筒部



SK08
 1. 土色シルト (10Y R 2/1) 断面は中円筒部
 2. 土色黄褐色シルト (10Y B 2/2) 断面は中円筒部
 3. 黒色シルト (10Y B 2/1) 断面は中円筒部
 4. 黒色シルト (10Y B 2/1) 断面は中円筒部



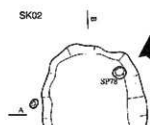
SK01
 1. 土色シルト (10Y R 2/1) 断面は平坦
 2. 黒色シルト (10Y B 2/1) 断面は不均整
 3. 黒色粘土土 (5Y 2/1) 断面は小円筒



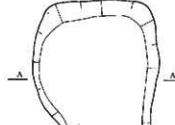
SK04
 1. 土色シルト (10Y R 2/1) 断面は中円筒部
 2. 土色黄褐色シルト (10Y B 2/2) 断面は中円筒部
 3. 黒色シルト (10Y B 2/1) 断面は中円筒部



SK07土色
 1. 土色シルト (10Y R 5/1) 断面は明瞭な同心
 2. 土色シルト (10Y R 2/1) 断面は中円筒部を含む
 3. 土色シルト (10Y R 2/1) 断面は中円筒部を含む
 4. 土色シルト (10Y R 2/1) 断面は中円筒部を含む



SK02
 1. 土色シルト (10Y R 2/2) 断面は明瞭な、少量の灰化層を含む



SK08
 1. 土色シルト (10Y R 2/1) 断面は中円筒部
 2. 土色黄褐色シルト (10Y B 2/2) 断面は中円筒部
 3. 黒色シルト (10Y B 2/1) 断面は中円筒部
 4. 黒色シルト (10Y B 2/1) 断面は中円筒部

図5 遺構概略図 (1/200) ・遺構図(1) (1/80) ・旧河道 (1/50)

3. 遺構

遺構は東端にある旧河道に沿うように調査区中央を南西から北東に向け帯状に分布している。西側に遺構が少ないのは過去の耕地整理で削平された結果であり、削平前の遺構密度は高かったと考えられる。東側は約10cm程度の段を境にして東側の遺構密度が低い。このことは、この範囲が旧河道の影響を受けやすい箇所であったためと判断される。つまり、今回の調査区は、遺構密度が最も高いと推測される西側が削平を受け、遺構分布域の縁辺部が削平されずに残ったと考えられる。遺物包含層となるⅡ層が旧河道付近でしか遺存していないことから、削平は調査区全域に及んでおり、少なくとも遺構上部は削平を受けていると考えられる。遺構の帰属時期については削平が行われているため検出状況からは判断できないが、出土遺物の帰属年代に従えば15世紀代と考えられる。

(1) 土坑

8基確認した。平面形は隅丸方形が多くSK07を除き全体的に浅いが、これは削平を受けた結果である。各遺構の掘り込みはⅢa層で終わっており、礎石を主体とするb層までは達していない。SK05・07は調査区の北壁にかかるように検出したため断面で掘込み面の観察が出来た。SK05はわずかに遺存していたⅡ層からの掘り込みを確認し、SK07はⅡ層上面から掘り込む。SK07と他の遺構覆土を比較するとSK07以外はⅡ層を主体とする黒色系の覆土であるのに対し、SK07は褐色系の覆土である。このことからSK07は他の遺構より新しい時期と考えられる。

遺物が出土した土坑は少なく、この後触れるSK03を除けばSK01の中世土師器(1)・SK07の珠洲(6)があるのみである。

a. SK03

調査区中央部に位置する土坑で今回の調査で検出した遺構では最も大きな遺構である。南北に長い隅丸長方形を呈し、北東角から溝が伸び、SK06とつながっている。SE17を遺構内で検出した。土坑底面はほぼ平坦であるがSE17周囲が窪んでいる。また、7基の小穴も確認した。これらの小穴は遺構検出時には確認出来ず、SK03掘削後に底部で確認したため、同時期かもしくは古いと考えられる。

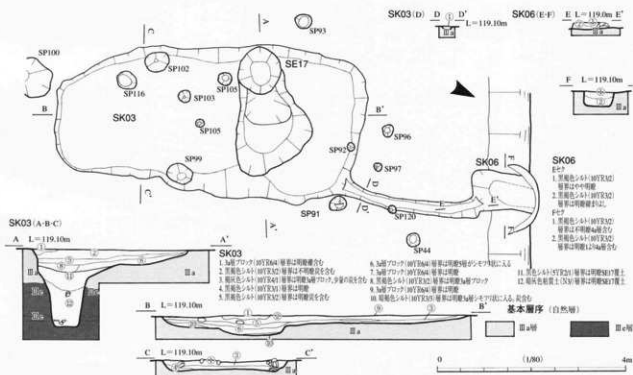


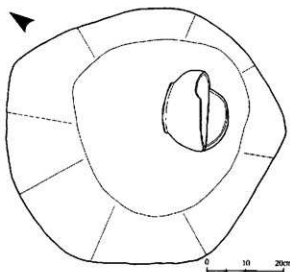
図6 遺構図(2) SK03・06 (1/80)

SK03とSE17との関係は次の様に考えている。切り合い関係で見るとSE17はSK03と同時期かもしくは古い。
 ①～⑥層がSK03覆土、⑦～⑫層がSE17覆土である。①層は擾乱、②層は黒色土壌層で炭を含むことから最終埋没層、③層は②層にⅢa層のブロックを含むことから人為的な埋め土と考えられ、遺構廃棄時の層と考える。②・③層の層界は不明瞭で③層が埋められた後放棄されたため②層が堆積したと考えられる。④～⑩層は遺構内に見られる部分的な堆積層である。⑥・⑧層（SK03）と⑪層（SE17）の層界はやや明瞭である。SE17が古いと仮定した場合、SK03機能時にSE17は埋められており、作業面となる⑩層と埋め土である⑥・⑧層の層界は明瞭となるはずであるが、断面観察ではそのような痕跡は確認できなかった。SE17とSK03を同時期であるとする積極的な証拠は提示できないが、SE17とSK03は同時期と解釈した方が理解しやすい。北東角から伸びる溝とSK03は切り合い関係がなく同時期と考えて良い。地形は北に向かって低くなっており、井戸から汲み上げた水の排水溝として機能していたと考えられる。出土遺物はSK03から中世土師器（2）・珠洲（3～5）が出土し、SE17からは中世土師器（26・27）、珠洲底部（28）がある。

(2) 井戸

井戸と判断した遺構は全部で16基である。その判断基準は、Ⅲ層との関係で湧水層（Ⅲe'・Ⅲf層）まで達していること、断面観察で柱根痕跡などの遺構の可能性を示す痕跡が認められないことなどである。井戸内部に施設もしくはその痕跡は確認出来なかったが、廃棄時に抜き取り等の行為が行われた可能性が否定できないため、素掘り井戸との記載はしていない。SE02は最も浅いが、湧水層に辛うじて達していたため井戸として扱った。しかし、排水枦の可能性もある。

SE06の底部には中世土師器が2枚重ねられた状態で出土した。SE07には直径20～30cmの角礫が投げ込まれていた。SE09・14の底部から漆器碗が出土している。SE11からは石臼・石鉢が出土している。これらの事例は井戸祭祀に関連すると考えられる。



SE14 漆碗出土状況 (1/10)

遺構番号	直径(m)	掘削深(m)	最浅層深(m)	掘削深(m)	掘削深(m)	井戸構造	出土遺物	出土層位	備 考
SE 1	0.84	1.11	117.9	119.01	Ⅲ e'	なし	中世土師器・珠洲	上層	
SE 2	0.8	0.7	118.25	118.95	Ⅲ e'	なし			浅いが、湧水層まで達している
SE 3	0.66	1.04	118	119.04	Ⅲ c'	なし			
SE 5	0.69	0.87	118.1	118.97	Ⅲ c'	なし	中世土師器	上層	人為的に「気」に埋められている。上層から遺物の白土が多い
SE 6	0.78	1	117.9	118.9	Ⅲ f	なし	中世土師器	下層	最下層に薄い自然堆積層があり、井戸底部に中世土師器の定形品が2枚(4-5)重ねられて出土
SE 7	0.76	1.11	117.9	119.01	Ⅲ e'	なし	中世土師器・珠洲	下層	最下層に炭層が堆積しておりそこから中世土師器の定形品が1枚(17)出土
SE 8	0.82	1.03	117.96	119.01	Ⅲ e'	なし			
SE 9	0.84	1.43	117.65	119.08	Ⅲ f	なし	中世土師器・漆器碗	下層	井戸底部から漆器碗(56)が出土
SE 10	0.8	1.3	117.78	119.08	Ⅲ f	なし	木製品(箸状木製品)	下層	
SE 11	0.8	1.07	117.95	119.02	Ⅲ e'	なし	中世土師器・珠洲・木製品	下層	最下層に炭層が堆積しておりそこから石製品(45~47)出土
SE 12	0.7	1.06	117.58	119.05	Ⅲ e'	なし	中世土師器	上層	
SE 13	0.71	1.05	117.95	119.02	Ⅲ e'	なし			
SE 14	0.7	1.32	117.5	119.02	Ⅲ e'	なし	中世土師器・木製品・漆器碗	下層	井戸底部から漆器碗(59・60)が重なって出土
SE 15	0.68	1.12	117.9	119.02	Ⅲ c'	なし	木製品(箸状木製品)	下層	
SE 16	0.63	1.2	117.84	119.04	Ⅲ e'	なし	中世土師器	上層	
SE 17	0.95	1.68	117.36	119.04	Ⅲ e'	なし	中世土師器・珠洲・木製品(漆板)	下層	井戸底部より漆板(62)出土

表2 井戸観察表

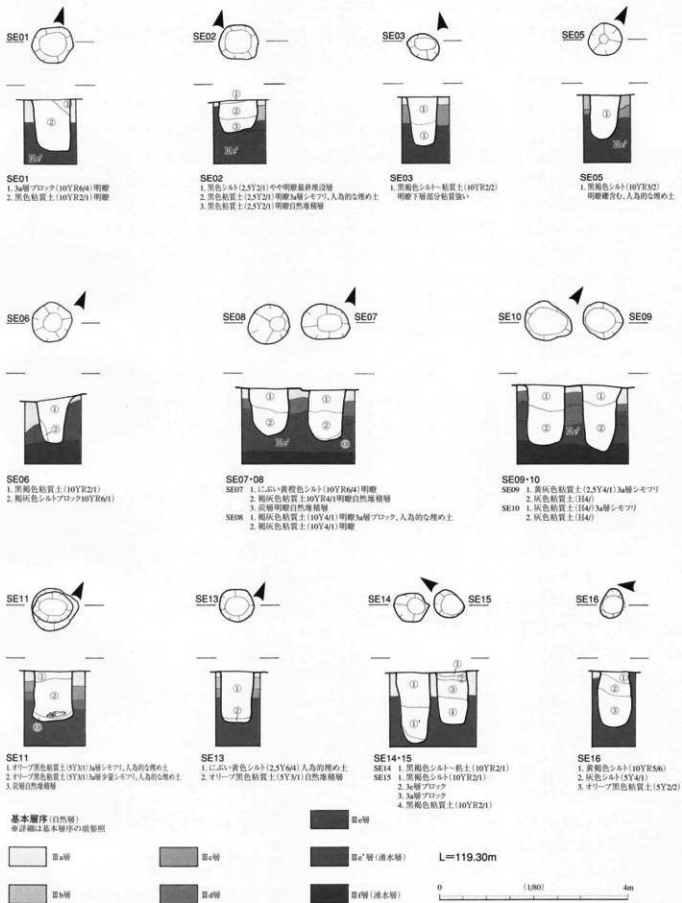


図7 遺構図(3) 井戸 (1/80)

(3) その他の遺構 小穴

ここでは、これまで述べてきた土坑・溝・井戸などの範疇に属さない、平面プランが小規模な遺構（掘立柱建物の柱穴や枕等の概念も含む）、いわゆる「小穴」のについて述べる。まずは調査方法にふれた後、その概要を述べる。

a. 小穴の調査方法

小穴から多くの情報を効率的に引き出すことに調査の主眼を置いた。中世集落遺跡で普遍的に見られる小穴はそれ自体小規模で含まれる情報量は少ないが、小穴の集合体としての掘立柱建物は集落遺跡を考える上では極めて重要な位置を占めている。掘立柱建物を小穴群から抽出する際、これまでは平面プランの要素が大半を占めていたが、これに断割り断面から得られた情報を加味することにより、より客観的な掘立柱建物の抽出し認知する基準を検討する一つの試みである。

①、小穴を確認した段階ですべて一段（約3cm）掘り下げ、同時に遺物の有無に関係なく遺構番号を与える。一段掘り下げた段階の平面で他の遺構との切り合いや柱痕の有無を確認し、1/20で平面図化する。この後、検出した小穴を柱穴とした場合、どの様に掘立柱建物を構成するか現地を検討し、記録しておく（掘立柱建物の第一次検討）。他の遺構に関しては土層観察用のセクションを残し記録後完掘する。この時点で小穴を除きすべて完掘した状態となり、平面測量を行う。土坑など大型遺構内に掘り込まれている柱穴など平面プランが小規模な遺構については柱状に残し、他の部分は完掘する。

②、平面測量後、小穴の断割り作業を行う。まず、先に記録した遺構の平面プランに基づき、遺構同士の切り合い関係がある場合は切り合い関係が断面で観察できる方向を断割る。柱痕と思われる痕跡がある場合はその中央をとるように、痕跡がない場合は遺構の中央部をとるように断割る。第一次検討の時点で掘立柱建物を構成する可能性が高いと判断した場合には主軸に沿って断割りラインを設定する。なお、断割方向は写真撮影や断面観察の行いやすさを考慮して逆光にならない北側以外を断ち割る。

③、断割り終了後、平面プランで確認した切り合いや柱痕が、断割り断面においても同様に観察できるを確認する。平面観察と断面観察で矛盾が生じた場合その原因を再度検討し、矛盾が生じないように解釈する。また、小穴深度と地山との関係を記録しておく。第一次検討において認識した掘立柱建物について構成する小穴を建物の柱穴として認知して良いか再検討する。ここで重要になるのが柱穴の判断基準であるが柱痕や掘り方の有無・断面にレンズ状堆積が見られないこと。断割りの断面が四角形もしくは「U」字状をしていることを要件とした（「V」字状のものは打ち込んだ枕である可能性があるため除外する）。

b. 小穴の概要

今回の調査では124基の小穴を確認した。すべて断割り調査を行い、先の基準に従い以下の4つに分類した。

Aタイプ 明確に柱根痕跡を有し、断面形から見ても確実に柱穴であると考えられるもの。

Bタイプ 明確な柱根痕跡はないが、断面形から見ても柱穴である可能性が高いもの。

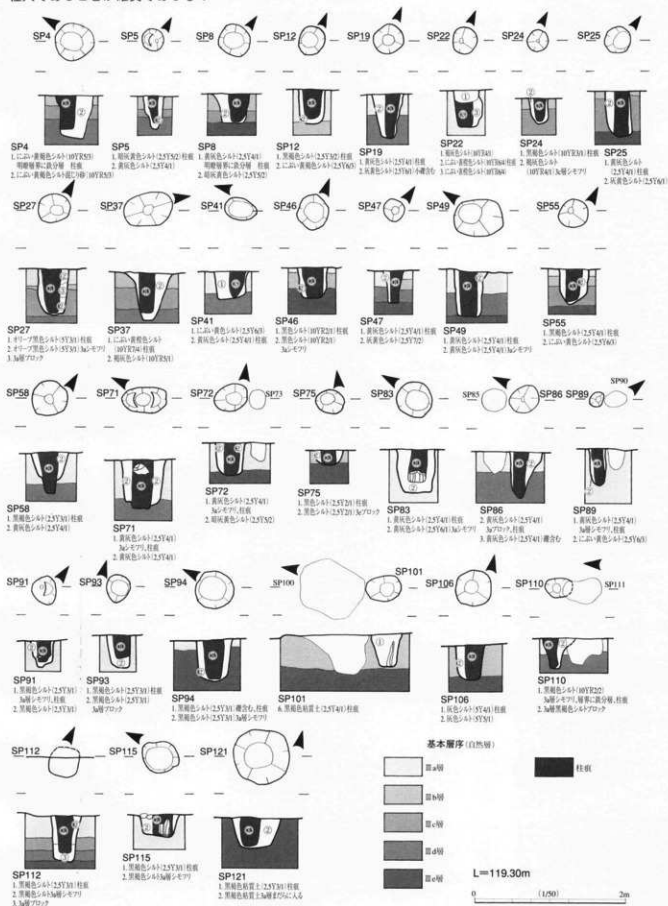
Cタイプ 柱根痕跡もなく断面形から見ても柱穴の可能性の低いもの。

Dタイプ 柱根痕跡はなく、遺構断面で見られる底部が丸く、且つ浅い。長期間埋められずにいた痕跡であるレンズ状堆積等が見られるなど柱穴以外の性格をもつと考えられるもの。

遺物はAタイプの小穴から多く出する傾向が見られた。S P22からは完形の中世土師器が4点、柱根痕跡の下部から出土しており、祭祀関連の可能性が指摘できる。

S P82・81・94・76・115とS P69・83・63・88・84は平面的には一直線に並ぶため横列の可能性を考えたが、その内、Aタイプは94・115、83であり、S P81・82・63、64はDタイプに分類されたため同一遺構とは考えにくく、横列の可能性は低いと判断した。

柱穴であることが確実であるもの



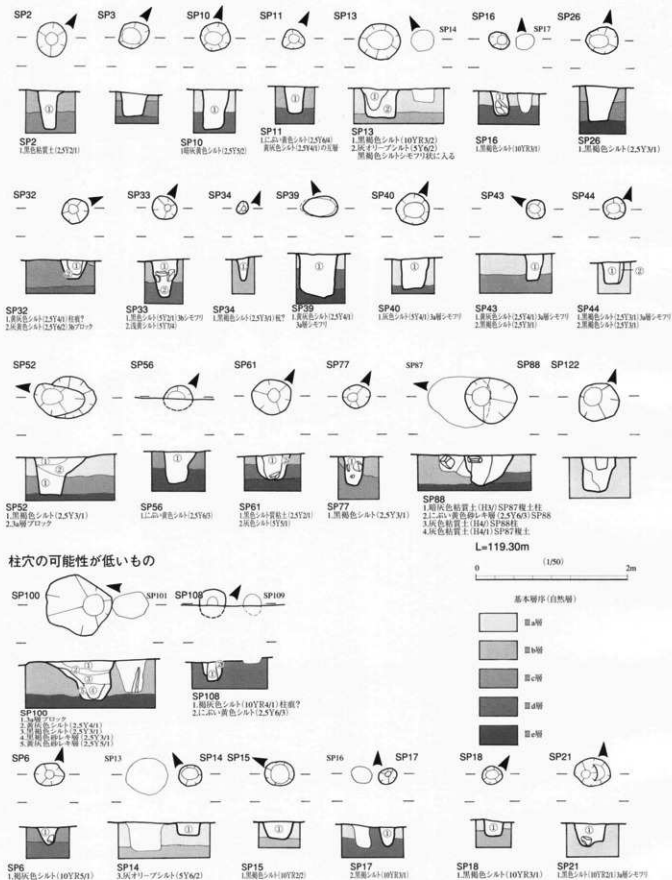


図9 遺構図(4) 小穴(2) (1/50)

柱穴の可能性が低いもの

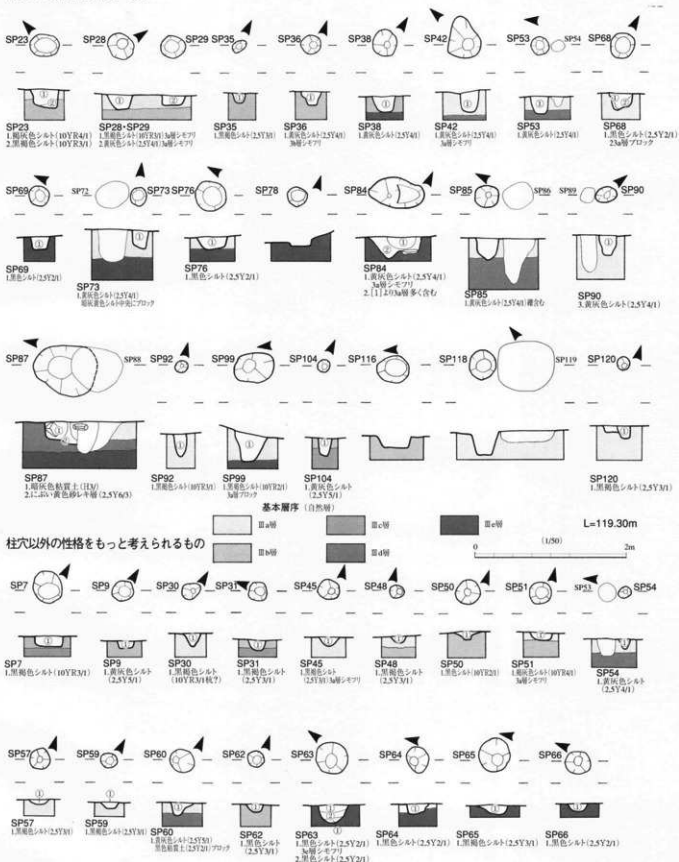


図10 遺構図(5) 小穴(3) (1/50)

柱穴以外の性格をもつと考えられるもの

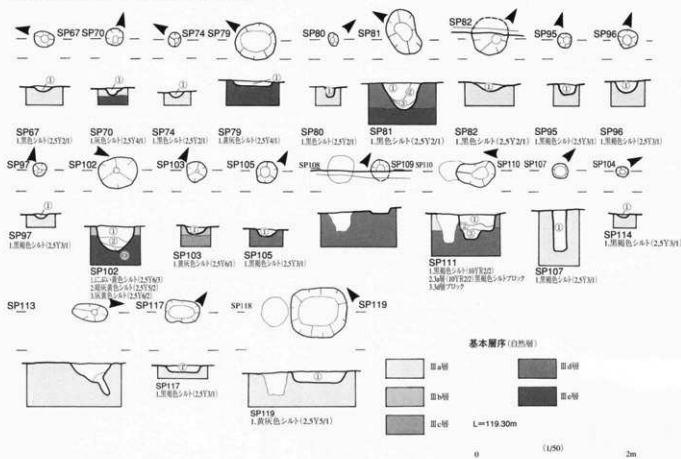


図11 遺構図(6) 小穴(4) (1/50)

S P 77・41・86・24・37・89・112は現地調査段階では掘立柱建物の可能性は考えていなかった。しかし、S P 77を除きすべてAタイプであり、S P 77もBタイプで、覆土中の石は柱根痕跡が腐食もしくは抜き取った跡に混入したと捉えれば、柱穴の可能性は高いと考えられる。また、調査区外へ伸びるが、S K 05と主軸方向を同じにするなど平面的に見ても掘立柱建物としても矛盾はない。今回は現地できちんと認識できなかったため、可能性に留める。

柱根が腐らずに残っていた事例が4例あった。S P 124は当初、井戸状遺構 (S E 04) として扱っていたが、掘削が進み柱根 (65) を確認したため柱穴とした。柱根抜き取り後、その下には珠洲 (41) が敷き詰められており、柱穴の沈み込み防止に用いられていたと考えられる。S P 83は断削り時に柱根の遺存を確認した。断面で確認した柱根痕跡と柱根はほぼ同径であった。柱根は中心部分が腐り、ドーナツ状になっている。底部は水平で、柱穴の掘り方底部より10cm程度高く、浮いた状態であった。これは、掘り方掘削後、高さ調整のため一部埋めもどした可能性を考えている。S P 101・115は柱根が腐食し細くなった状態であった。S P 115では柱根痕跡は確認できたが、S P 101では確認できなかった。

(4) 旧河道

調査区の東南端で確認している。調査対象地の水田の東側は用排水路・農道をはさみ約1mの比高差で低くなっており、旧河道の痕跡を示している。試掘調査でも北流する旧河道を確認しており、井口A遺跡の東端はこの旧河道を境とする。覆土は黒色土を基本とするII層で埋没している。III層との層界は不明瞭で漸移層が発達していることから人為的に掘削されたのではなく、いわゆる自然河道と推測される。断面観察からゆっくりと埋没していったと考えられ、上流での流路の変化により水流が絶たれ、徐々に湿地化していったと考えられる。

5. 遺物

調査では土器類が浅箱で約6箱、木製品が4箱の出土遺物があった。ここでは各遺物の個別の説明は、後出の土器観察表に譲り、特徴的な遺物や土器分類などを述べる。

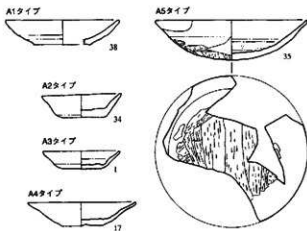
全体的に遺物の総量は少なく、中世の遺物、特に後期の遺物が大半を占める。現地調査での遺物の分布は次のような傾向が見られた。遺物包含層が削平されているため遺構外からの出土はほとんどない。中世土師器・珠洲が大半を占め、瀬戸美濃天目茶碗・瓦質土器・青磁碗底部（SK03）、青白磁の壺底部（SE17）がそれぞれの遺構から1点ずつ出土している。その他、表土から越中瀬戸・伊万草などの近世陶磁器が数点出土している。石製品は井戸（SE11）から3点、旧河道から砥石が1点出土している。木製品は井戸からの出土が大半を占め、小穴（SP101）から曲物底部が出土している。

中世土師器に関しては宮田進一氏の編年[宮田1997b]を参考にした。調査では非ロクロ整形（B類）のタイプは見受けられず、すべてロクロ整形（A類）であった。これらを口縁・余体の形態から5器種に分類した。珠洲は吉岡康暢氏[吉岡：1994]、の編年をそれぞれ参考とした。

(1) 中世土師器

32固体の中世土師器を掲載し、次のとおり5タイプに分類した。

- A1 体部は内湾ぎみに立ち上がり、短部は角張り納める。全体的に器壁は厚手である。口径は10.8~12.0cm、器高は2.4~2.7cmを測る。このタイプはSE01、SP20・124などから5点出土している。
- A2 体部は直線的に急角度で立ち上がり短部は丸く納める。見込み部分は平坦で、全体的に器壁は厚手である。口径は8.2~8.4cm、器高は2.0~2.4cmを測る。このタイプはSE05・SP124から4点出土している。
- A3 体部は内湾気味に立ち上がり体部中ほどから外湾しながら伸び、端部で再び内湾するように立ち上がる。見込み部分は体部との境に段を有し中央部が少し盛り上がる。全体的に器壁は薄手の作りである。口径は7.2~11.0cm、器高は1.7~2.0cmを測る。このタイプの出土数が最も多く12点出土し、中世土師器全体の1/3を占める。出土遺構はSK01、SE06・09・12・17、SP22である。
- A4 体部は少し内湾気味に立ち上がり、中央上部で外反する。端部に至り再び内湾気味に立ち上がる。見込み部分は体部との境に段を有し高くなっている。体部内面にはらせん状のロクロ目が残る。全体的に器壁は薄手の作りである。口径7.2~11.0cm、器高1.7~2.0cmを測る。調整などから、A3の大きなタイプの可能性も考えられるが、口縁部の処理方法に違いが見られたためここでは別タイプとした。このタイプはSE07・12から2点出土している。
- A5 ロクロ整形後、外底部の糸切痕をヘラ削りしている。丸底で体部は内湾品川立ち上がり、体部中央で外反し端部に至り再び内湾気味に立ち上がる。このタイプには端部が立ち上がらず、外反するものもある。内面調整は見込み部分が高くなり、体部との境に段を有する。また体部内面にはらせん状のロクロ目が残る。このタイプが出した遺構は多く、SK03、SE01・05・11・16、SP124・115から出土している。



中世土師器分類

38は使用により、内面調整痕が摩滅しており、一定期

間使用されていたことがうかがえる。他のタイプには内面調整が使用により摩滅しているものは見受けられず、短期間の使用かもしくは内面が摩滅しないような使用方法であったと考えられ、A1タイプとは使用方法・期間に違いがあることがうかがえる。

掲載した中世上・陶器で口縁部が遺存していたものは25点あるが、その内5点に口縁部に煤の付着が観察できた。灯明皿として使用していたと考えているが、この5点すべてがA3タイプであった。サンプル数が少ないため確実なことは言えないが、A3タイプは灯明皿専用器の可能性が指摘出来る。この件については、まとめの項で再びふれる。

(2) 珠洲

11点掲載した。胴部片が多く時期が明確に判る物は少ない。4のすり鉢はSK03から1点出土している。胴部片であり、詳細な時期は不明であるが、おろし日から吉岡編年のV期に相当すると考えられる。41は意T種の胴部片である。44は表土からの出土で、V期に相当すると考えられる。

(3) 石製品

3点掲載した。共にSE11からの出土で石門の下片(45)・上片(46)、石鉢(47)である。3点とも隅丸方形を呈し、平面形およびその法量がよく似ている。石材は肉眼観察では同一石材であり、凝灰角礫岩の一種である福光町桑山産の「桑山石」であろう。出土状況から、井戸を廃棄する時点で祭祀もしくは石製品を投棄したと考えている。

45と46は平面形が隅丸方形を呈し、石臼としては特異な形態であり、過去、県内での出土例はない。45は上面の摺り面が傾斜し、かつ、臼目の痕跡はまったく見られず、同心円状の使用痕が残る。上面の「ふくみ」は2cm程度ある。底部は粗く仕上げられており、部分的に擦痕が残るが、これは使用時に床面に擦れた痕跡であろう。46は横打ち込み式で、両方に挽き木を挿入する方形の穴が開いており、その深さには差が見られる。回転方向は供給口である「ものいれ」の下面部形態から反時計回りに回転する正常臼であることがわかる。下面部のふくみは破損のため不明である。上縁部のくぼみ部分は粗く仕上げられており、縁との境に浅い溝が巡る。この45・46は形態・法量ともよく似ており、この二つを重ね合わせてみたところ摺り面がほぼ一致したためセット関係にあるものと考えられる。47は方形の石鉢で、内面は円形にくぼみ、粗く仕上げられている。

(4) 木製品

出土した木製品はSP101から出土した曲物底板(63)を除きすべて井戸から出土した。これらの木製品については樹種特定などは行っていない。また、漆器碗に関しても木地特定・塗膜分析は行っておらず、すべて調査担当者の肉眼観察によることを断っておく。

50・51は薄い細長い正皿板で、両端は破損しているが刃物による切れ目が入っていた痕跡がある。実測図左側は穿孔された穴に薄いひも状の樹皮が残っている。これらは方形の折敷の脚板と考えられ、両端の切れ目は折敷の角の部分に当たるため、内側に脚板を折りやすくするために設けられたためであり、ひも状の樹皮は脚板と底板を止めるためのものと考えられる。

52は半円形の木製品で正皿板を使用し「寧」に削られている。用途は不明である。

56・59・60は漆器碗である。56は内湾気味に立ち上がる体部をもち、高台は低く真直ぐ下がり、外底部はほぼ水平である。横木取りで木地は広葉樹系の樹木を使用している。総黒色漆(未測定)で内面には赤色漆(未測定)により大きな木葉(料葉?)が一枚描かれている。外面にも赤色漆(未測定)がわずかに残るがほとんど剥落しており、文様の内容は不明である。

59と60はSE14の底部から一括出土した。出土状況は法量が小さい59に大きな60がまった状態であった。このため59はかなり変形していた。59は体部が内湾気味に立ち上がり、比較的高い高台が真直ぐ下がる。外底部はほぼ水平で中央部には長方形の窪みがある。横木取りで木地は広葉樹系の樹木を使用している。総黒色漆(未測定)

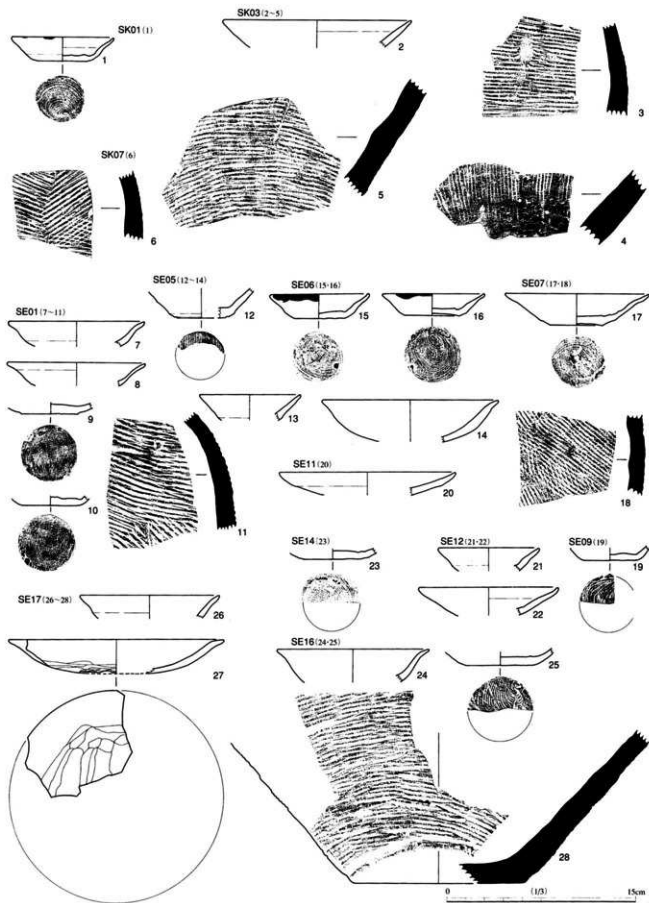
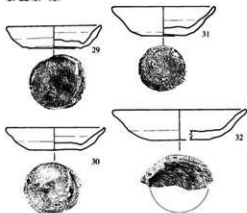
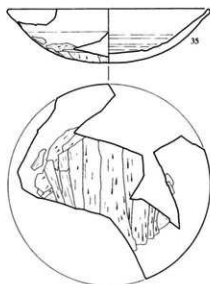


图12 遺物実測図(1)

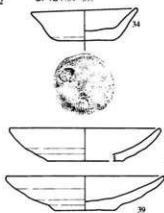
SP22 (29-32)



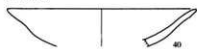
SP91 (33)



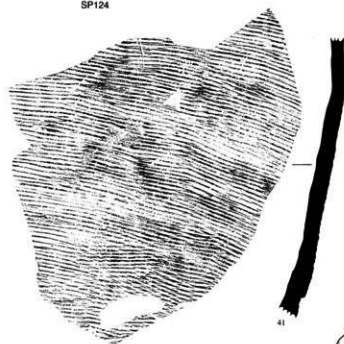
SP124 (34-39)



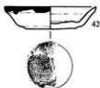
SP115 (40)



SP124



遺標外出土遺物
表採 (42)



旧河道 (43)

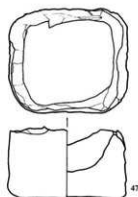
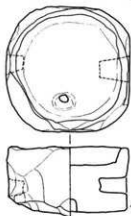
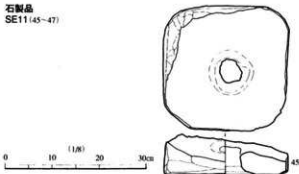


X17:Y22 (44)



0 5 (1/3) 10 15cm

石製品
SE11 (45-47)



0 10 (1/3) 20 30cm

图13 遺物実測図(2)

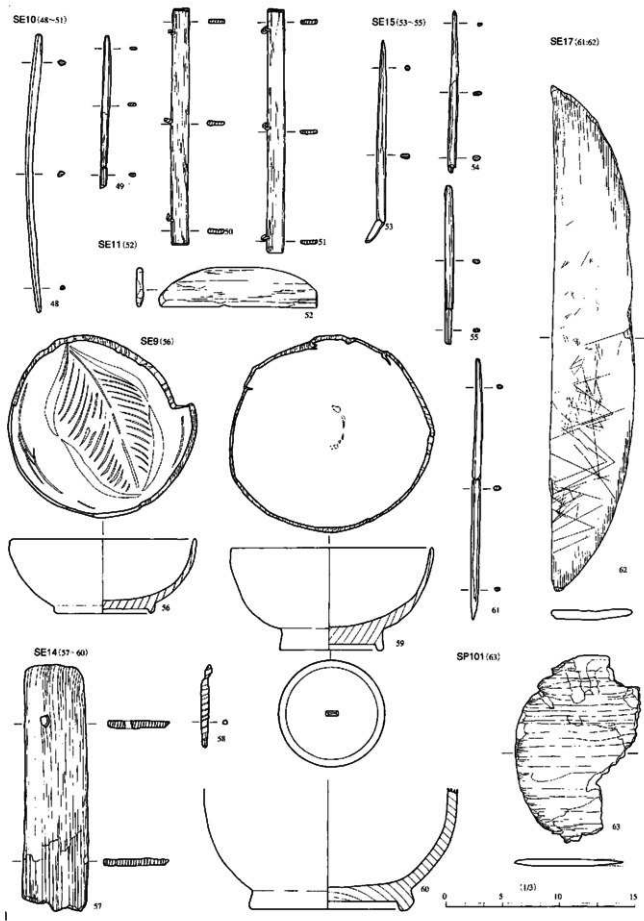


図14 遺物実測図(3) ※62のみ1/4

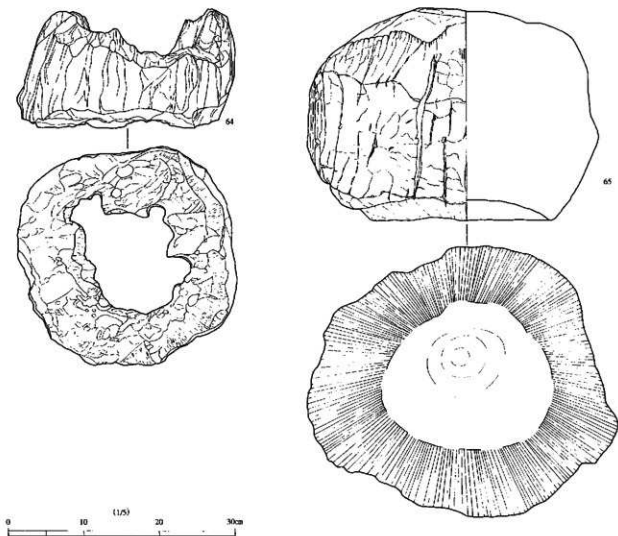


図15 遺物実測図(4)

で内外面には赤色漆(未同定)がわずかに残るが、ほとんど剥落しており文様の内容は不明である。

60は碗としているが鉢の可能性もある。体部は内湾気味に立ち上がり、高台は短く、外側へ着ん張る。完形品ではないが、遺存部分で直径20cmを超え、現在富山県で確認されている中世後期の漆器碗(もしくは鉢)中で最大である。横木取りで木地は広葉樹系の樹木を使用している。総黒色漆(未同定)で外面には赤色漆(未同定)がわずかに残るが、ほとんど剥落しており文様の内容は不明である。内面底面を中心として、漆塗膜が磨滅して木地が露出している。これは使用痕と考えられ、他の2点にはこのような磨滅痕はないことから、使用方法が違うと考えられる。

58は箸状の木製品に樹皮(桜の皮?)の紐を巻き付けた物で、用途等は不明である。62・63の側面には木釘の痕跡が残ることから曲物の底板と考えている。共に正目板を使用している。62は両面に刃物の痕が残り、まな板などに転用されていたことがうかがえる。

64・65は柱根である。64は木の中心部が腐りドーナツ状になっている。底部は平坦で、腐食によるために工具痕は残っていない。65は全体的に表面が炭化している。底部中央は窪みこは炭化していない。上面は比較的平坦で、炭化してはいるが磨痕により表面の炭が薄くなっている。

No.	X	Y	遺物番号	部	種	種別	口径(cm)	高さ	口径/高さ	色	器	備考	
1			SK01	中世土師器	甕	A3	8.0	1.9	—	—	—	にぶい黄褐色、10YR6/4	焼成、良
2			SK03	中世土師器	甕	A5	15.0	2.3	—	—	—	にぶい黄褐色、10YR6/4	焼成、良
3			SK03	珠洲	壺	—	—	—	—	—	—	灰色、H5/	焼成、良
4			SK03	珠洲	十文字鉢	—	—	—	—	—	—	灰白色、5Y7/1	焼成、良、5期?
5			SK03	珠洲	壺	—	—	—	—	—	—	灰色、10Y6/1	焼成、良
6			SK07	珠洲	壺	—	—	—	—	—	—	赤黄褐色、10YR5/2	—
7			SE01	中世土師器	甕	—	10.8	—	—	—	—	暗灰黄色、2.5Y5/2	焼成、良
8			SE01	中世土師器	甕	A5	11.0	—	—	—	—	暗灰黄色、2.5Y5/2	焼成、良、ロクロ成形
9			SE01	中世土師器	甕	A1	—	—	—	—	—	外黄褐色、7.5Y6.6、内面にぶい褐色、7.5Y6/4	焼成、良
10			SE01	中世土師器	甕	A3	—	—	—	—	—	にぶい黄褐色、10YR7/4	焼成、良、ロクロ成形
11			SE01	珠洲	壺	—	—	—	—	—	—	灰色、H5/	—
12			SE05	中世土師器	甕	A2	—	2.4	—	—	—	にぶい黄褐色、10YR6/3	焼成、良
13			SE05	中世土師器	甕	A2	—	2.0	—	—	—	にぶい黄褐色、10YR6/3	焼成、良
14			SE08	中世土師器	甕	A5	14.0	3.3	—	—	—	にぶい黄褐色、10YR6/3	焼成、良、口付成形
15			SE06	中世土師器	甕	A3	7.9	2.0	—	—	—	にぶい黄褐色、10YR6/3	焼成、良、口付成形
16			SE06	中世土師器	甕	A3	8.1	1.7	—	—	—	にぶい黄褐色、10YR6/3	焼成、良、口付成形
17			SE07	中世土師器	甕	A4	11.2	2.5	—	—	—	にぶい黄褐色、10YR6/3	焼成、良、口付成形
18			SE07	珠洲	壺	—	—	—	—	—	—	灰色、10Y6/1	焼成、良
19			SE09	中世土師器	甕	A3	—	—	—	—	—	灰黄褐色、10YR6/2	焼成、良、ロクロ成形
20			SE11	中世土師器	甕	A5	14.0	18	—	—	—	にぶい黄褐色、10YR6/3	焼成、良、ロクロ成形
21			SE12	中世土師器	甕	A3	8.0	18	—	—	—	にぶい黄褐色、10YR6/3	焼成、良、ロクロ成形
22			SE12	中世土師器	甕	A4	11.0	22	—	—	—	にぶい黄褐色、10YR6/3	焼成、良、ロクロ成形
23			SE14	中世土師器	甕	A3	—	—	—	—	—	にぶい黄褐色、10YR6/3	焼成、良、ロクロ成形
24			SE16	中世土師器	甕	—	12.0	26	—	—	—	にぶい黄褐色、10YR6/3	焼成、良、ロクロ成形
25			SE16	中世土師器	甕	A5	—	11	—	—	—	外周黄褐色2.5Y7.1、内面にぶい黄褐色10YR6/4	焼成、良、ロクロ成形
26			SE17	中世土師器	甕	A3	11.0	—	—	—	—	にぶい黄褐色、10YR6/3	焼成、良、ロクロ成形
27			SK03	中世土師器	甕	A5	15.0	2.7	—	—	—	にぶい黄褐色、10YR6/4	焼成、良、ロクロ成形後、底面ヘラケズリ
28			SE17	珠洲	壺	—	—	—	—	—	—	灰色、H5/	焼成、良
29			SP22	中世土師器	甕	A3	7.5	1.8	—	—	—	にぶい黄褐色、10YR6/4	焼成、良、ロクロ成形
30			SP22	中世土師器	甕	A3	7.8	1.8	—	—	—	にぶい黄褐色、10YR6/4	焼成、良、ロクロ成形
31			SP22	中世土師器	甕	A3	8.2	2.3	—	—	—	にぶい黄褐色、10YR6/4	焼成、良、口付成形
32			SP20	中世土師器	甕	A1	10.6	2.4	—	—	—	にぶい黄褐色、10YR6/4	焼成、良、ロクロ成形
33			SP91	珠洲	壺	—	—	—	—	—	—	灰色、H5/	焼成、良
34			SP124	中世土師器	甕	A2	8.4	2.4	—	—	—	にぶい黄褐色、10YR6/3	焼成、良、口付成形
35			SP124	中世土師器	甕	A5	16.0	4.3	—	—	—	にぶい黄褐色、10YR6/3	焼成、良、ロクロ成形後、外底面ヘラケズリ
36			SP124	中世土師器	甕	A1	—	—	—	—	—	にぶい黄褐色、10YR6/3	焼成、良、口付成形
37			SP124	中世土師器	甕	A2	8.2	2.4	—	—	—	にぶい黄褐色、10YR6/3	焼成、良、ロクロ成形
38			SP124	中世土師器	甕	A1	12.0	2.6	—	—	—	にぶい黄褐色、10YR6/3	焼成、良、口付成形
39			SP124	中世土師器	甕	A1	12.0	2.7	—	—	—	にぶい黄褐色、10YR6/4	焼成、良、ロクロ成形
40			SP175	中世土師器	甕	A5	15.0	—	—	—	—	褐色、7.5YR7/6	焼成、やや良、ロクロ成形
41			SP124	珠洲	壺	—	—	—	—	—	—	灰白色、2.5Y7/1	焼成、良、内面に内附物が全面に付着、2次焼成を受ける?
42			排水溝内 旧河道内	中世土師器	甕	A3	7.2	1.8	—	—	—	にぶい黄褐色、10YR7/3	焼成、良、ロクロ成形
43			SP61-2層	珠洲	壺	—	—	—	—	—	—	灰色、H5/	焼成、良
44			SE11	心礎	石臼	—	26.0	9.0	—	—	—	灰色、H5/	焼成、良
45			SE11	心礎	石臼	—	27.0	15.5	—	—	—	—	—
46			SE11	心礎	石臼	—	27.0	15.0	—	—	—	—	—
47			SE10	木製品	箸	—	—	—	—	—	—	27.3	0.6
48			SE10	木製品	箸	—	—	—	—	—	—	12.0	0.6
49			SE10	木製品	箸	—	—	—	—	—	—	18.6	1.4
50			SE10	木製品	箸	—	—	—	—	—	—	19.2	1.3
51			SE10	木製品	箸	—	—	—	—	—	—	12.5	3.2
52			SE11	木製品	箸	—	—	—	—	—	—	16.0	0.7
53			SE15	木製品	箸	—	—	—	—	—	—	2.9	0.6
54			SE15	木製品	箸	—	—	—	—	—	—	2.6	0.7
55			SE15	木製品	箸	—	—	—	—	—	—	—	—
56			SE09	木製品	漆塗り	—	14.9	6.9	—	—	—	—	—
57			SE14	木製品	漆塗り	—	—	—	—	—	—	19.6	5.1
58			SE14	木製品	漆塗り	—	16.1	8.2	—	—	—	6.4	0.6
59			SE14	木製品	漆塗り	—	—	—	—	—	—	—	—
60			SE14	木製品	漆塗り	—	—	—	—	—	—	—	—
61			SE17	木製品	漆塗り	—	—	—	—	—	—	20.6	0.7
62			SE17	木製品	漆塗り	—	—	—	—	—	—	48.9	9.8
63			SP101	木製品	漆塗り	—	—	—	—	—	—	14.7	0.5
64			SP83	漆塗り	漆塗り	—	28.5	15.6	—	—	—	—	—
65			SP24	漆塗り	漆塗り	—	38.5	27.7	—	—	—	—	—

表4 遺物観察表

3 章 ま と め

ここでは、遺構・遺物について、調査で判明したことや問題点・疑問点を述べたあと、遺跡の推移と周辺に所在する同時期の遺跡、特に井口域との関係を述べて、まとめて替えたい。

1. 遺構

過去の耕地整理の影響で遺構面が削平され切り合い関係をもつ遺構は少なく、遺構覆土もほぼ同一な状態であったため遺構自体から時期差を推定することは出来なかった。

(1) 井戸

15基の井戸を検出したが、井戸側などの施設は確認できなかった。今回のように施設等が検出できず積極的に井戸として認識が困難な場合、どのような要件をもって「井戸」とするかが現地調査での問題であった。一般的には井戸底が湧水層まで達していることが挙げられており[岩本：2001]、当調査でもこの要件に当てはまるものを井戸と報告している。しかし、根拠とする湧水層はあくまでも現時点での湧水層であり、湧水層自体は年間を通しても変化することが知られている。まして、過去の湧水層と、河道など地形が変化している現在の湧水層を同一と考えるのは問題がある。仮に湧水層まで達していても井戸以外の可能性も十分にあり[島田：1994]、「井戸」を認識するには、まったく別の要件を設定する必要性を今回の調査で感じた。なお、先述したとおり、井戸状遺構は調査の最後に重機を導入して断ち割りを行い覆土や地山との関係を記録したが、塚田氏が指摘しているとおり [塚田：2001]、報告書中に地山の堆積状態や湧水層について詳細に記述してあるものは少ない。記録保存の場合、断ち割りを行い覆土の堆積状態や地山との関係を把握するなど、基本的な井戸状遺構の調査方法を設定する必要性を感じている。

今回、100㎡当たりの井戸密度は1.25基である。県内の中世遺跡で確認された100㎡当たりの井戸密度の平均は約0.4基で [塚田：2001]、今回の井戸密度はその3倍に当たり県内でも有数の井戸密度である。梅原胡麻堂遺跡(50)は中世全般をとおり存続した集落遺跡であるが、中世後半(15～16世紀末)には基掘り井戸が「爆発的」に増えることが報告されており[島田：1994]、当調査区の井戸もこれと同じ動向を示すものであろうか。

(2) 小穴

掘立柱建物以外の遺構と違い、複数の柱穴の集合体という性格上、各柱穴の有機的なつながりを証明することが極めて難しい遺構である。「小穴」から「柱穴」をどの様に認識し、どの柱穴を組み合わせて1棟の建物を抽出するかは調査担当者の主観的な部分に左右されやすい。山本氏[山本：1996]が指摘するように理論的に掘立柱建物を確認する手法は確立しておらず、その抽出は非常に困難である。富山県の中世集落の様相を概観した宮田氏は14世紀以降農民層の階層分化により、その居住する建物に柱間や柱ならびにバラつきが出ることを指摘している [宮田：1997b]。当調査区で確認した遺構は、後述するが、中世後期に位置づけることができ、掘立柱建物を認識する要件としては平面プランより、柱穴自体がもつ情報を重視し掘立柱建物を抽出する必要性を感じ、先述した調査方法をとった。

2. 遺物

(1) 中世土師器

出土した中世土師器と他の遺跡からの出土例・分類を比較する。梅原胡麻堂遺跡(50) [越前：1996]ではA1タイプはNB類、A2・3タイプはRG類、A4・5タイプはRF類にあたる。井口域跡(4)ではA1タイプに該当するものはないが、A2タイプがA1類、A3・4タイプがA2類、A5タイプA4類にあたる。各遺跡で分類に関しては若干の違いは見られるが、梅原胡麻堂遺跡ではA1タイプは12世紀後半、A2～A5タイプは両遺跡とも15世紀後半に位置づけている。富山県の中世土師器編年[宮田：1997a]でも同様な年代観が与えられており、当遺跡で出土した中世土師器の年代観は上記で問題はない。

(2) 石製品

SE11出土の方形の石製品3点は、大量に石製品が出土した梅原胡麻堂遺跡(50)でも報告例が無い、特異な形態である。桑山石製の製品は16世紀以降に普及することが報告されているが[島田:1999]、3点の石製品はA5タイプの中世土師器とともに出土しており、木格的に商品として流通する以前の形態を示しているものと考えられる。

3. 遺跡の推移と周囲の遺跡との関係

出土遺物等から、当地区の帰属時期は12世紀後半と15世紀後半の2時期あるが、大半の遺構は15世紀後半に該当している。15世紀後半以降の遺構・遺物はほとんど無く、集落としては位置を変えたか集落自体が廃棄されたものと考えられる。赤祖父川扇状地上でこの時期に存続する遺跡は井口城の最後の時期であるⅢ期が挙げられる。中世土師器も同タイプのものが出土していることから同時期に存在するとともに、城と何らかのつながりを持っていたと考えられる。付近の明尊寺の出緒によれば、文明年間(1469~87年)に井口城は今村小太郎が居城したと伝えられている。なお、文明13年(1381年)井波瑞泉寺を中心とした一向一揆が福光城主石黒光茂と山田川において戦い、一向宗が勝利している。この戦いをさかんに井口村を含むこの一帯は一向宗の勢力圏に入っていたものと考えられる[井口村:1995]。想像を逞くすれば、今村氏が居城していた井口城もこの時期廃城となり、城とつながりをもっていた当集落も同時に廃棄されたのではないだろうか。

引用・参考文献

- 伊野近富 1995 『土師器Ⅱ』『概説 中世の土師・陶磁器』 中世土師研究会
伊野近富 1987 「かわらけ」考『京都府河原文化財論集第1集』 財団法人京都府河原文化財調査研究センター
若本正二 2001 『中世の井戸』『中世北陸の井戸』北陸中世考古学研究会
越前県庁 1996 『梅原胡麻堂遺跡出土の土師器編年』『梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告(遺物編)』 財団法人富山県文化振興財団富山県文化財事務所
斎藤洋治 1998 『大分県テキスト日本の扇状地』 古今書院
窪田明弘 2001 『越中(富山縣)の標榜1』『中世北陸の井戸』北陸中世考古学研究会
島田美佐子 1994 『第IV章まとめ 4.井戸』『梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告(遺構編)』財団法人富山県文化振興財団
島田美佐子 1999 『富山県の標榜』『中世北陸の石文化1』北陸中世考古学研究会
鈴木隆介 1997 『建築技術者のための地形図入門 第1巻 説図の基礎』 古今書院
鈴木隆介 1998 『建築技術者のための地形図入門 第2巻 丘陵地』 古今書院
鈴木隆介 2000 『建築技術者のための地形図入門 第3巻 丘陵』 古今書院
高岡徹 1980 『富山153井口城』『日本城郭大系 第7巻』 創史社
倉川諭 1980 『富山平野東部の段丘地形』『富山県地学・地理学研究論集 第7集』 富山地学会
橋本久和 1987 『中世土器の製作技法ノート(1)』『中世土器の基礎研究Ⅱ』 日本中世土器研究会
深井二郎 1980 『伴塚城の発掘から見た富山平野の形成過程 埋蔵文化遺跡と河川の変遷-』『富山県地学・地理学的研究 第7集』 富山地理学会
藤田邦雄 1989 『中世土器系論』『北陸の考古学Ⅱ』石川考古学研究会
藤田邦雄 1997 『中世加賀国の土師器標榜』『中・近世の北陸-考古学が語る社会史-』北陸中世土師研究会編 桂書房
吉岡慎輔 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
宮田進一 1997a 『越中国における土師器の編年』『中・近世の北陸-考古学が語る社会史-』北陸中世土師研究会編 桂書房
宮田進一 1997b 『越中国における中世集落の標榜』『中・近世の北陸-考古学が語る社会史-』北陸中世土師研究会編 桂書房
宮田進一 1992 『越中における中世土師器の編年』『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土師研究会
山本輝雄 1996 『7 住居の変遷』『考古学による日本歴史15 家族と住まい』 雄山閣
平凡社 1994 『日本歴史地名系第16巻 富山県の地名』
井口村 1995 『井口村史(上巻・下巻)』
井口村教育委員会 1990 『井口城跡 発掘調査概要』
井口村教育委員会 1998 『蛇喰A遺跡』
井口村教育委員会 1999 『蛇喰正覚寺遺跡』
井口村教育委員会 2000 『蛇喰地区に係る埋蔵文化財包蔵致死統調査報告』
井口村教育委員会 2001 『蛇喰正覚寺遺跡2』
角川書店 1979 『角川日本地名大辞典16 富山県』
日本ペドロジー学会 1997 『土壤調査ハンドブック改訂版』 博友社
福井県教育委員会 1979 『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告1』



図版1 作業風景 1.表土除去 2.包含層掘削 3.空撮 4.井戸断割り 5.井口中学校1年生見学 6.調査参加者



図版2 7.航空写真（平成8年）



図版3 8.航空写真（昭和22年）

この写真は、国土地理院長の承認を得て、米軍撮影の空中写真を複製したものである。
(承認番号) 平13北報、第325号



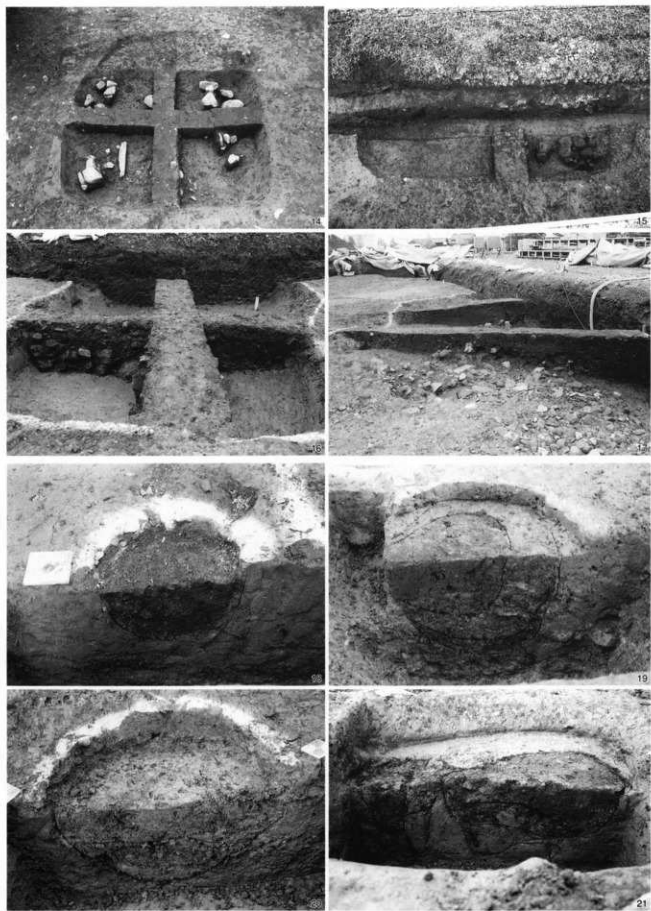
図版4 9.調査区近景（調査区南西側から砺波平野を望む）



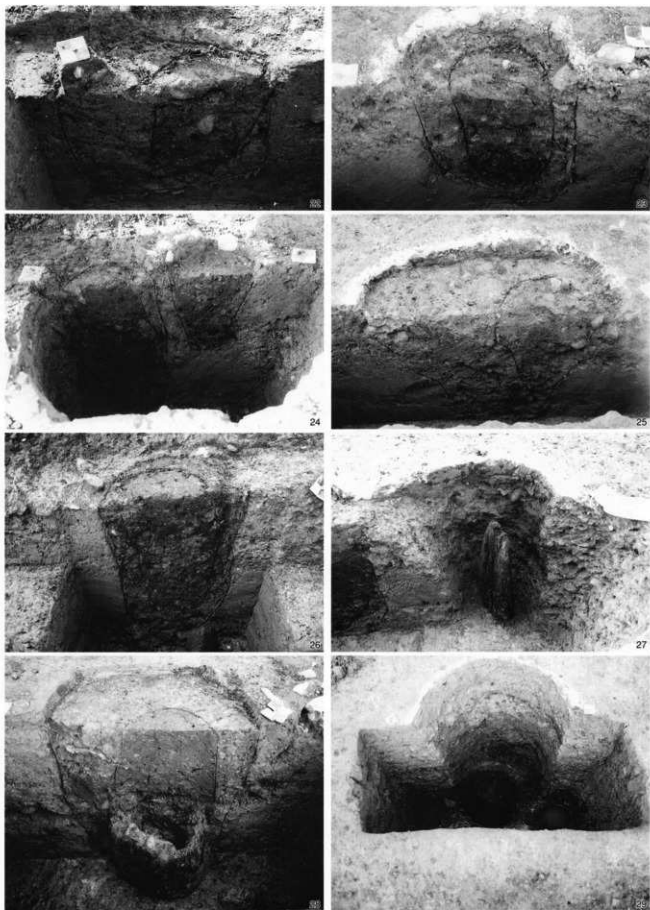
図版5 10.調査区全景（南西から） 11.調査区全景（東から）



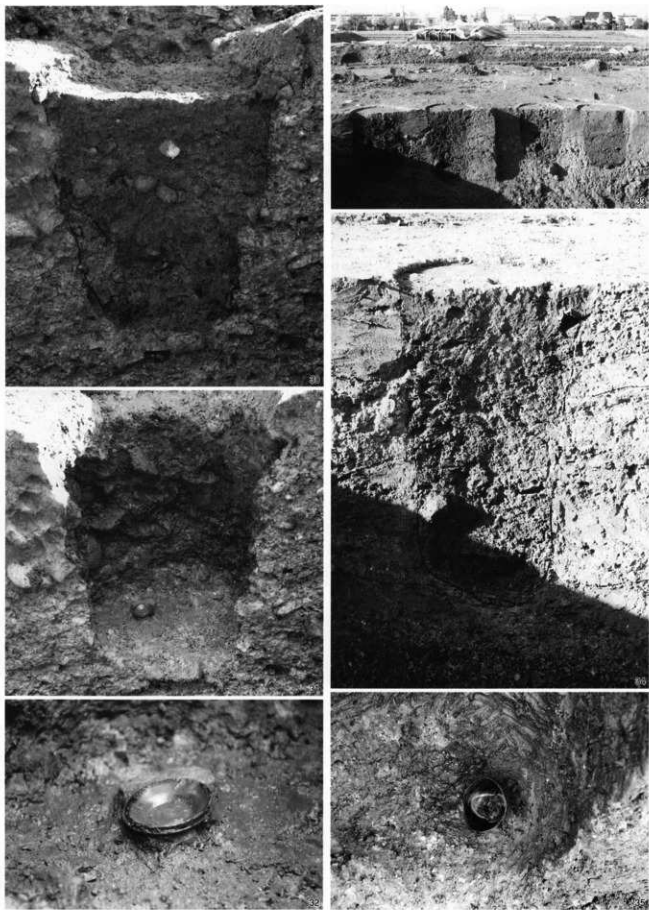
図版6 12.遺構集中区（西から） 13.遺構集中区（北から）



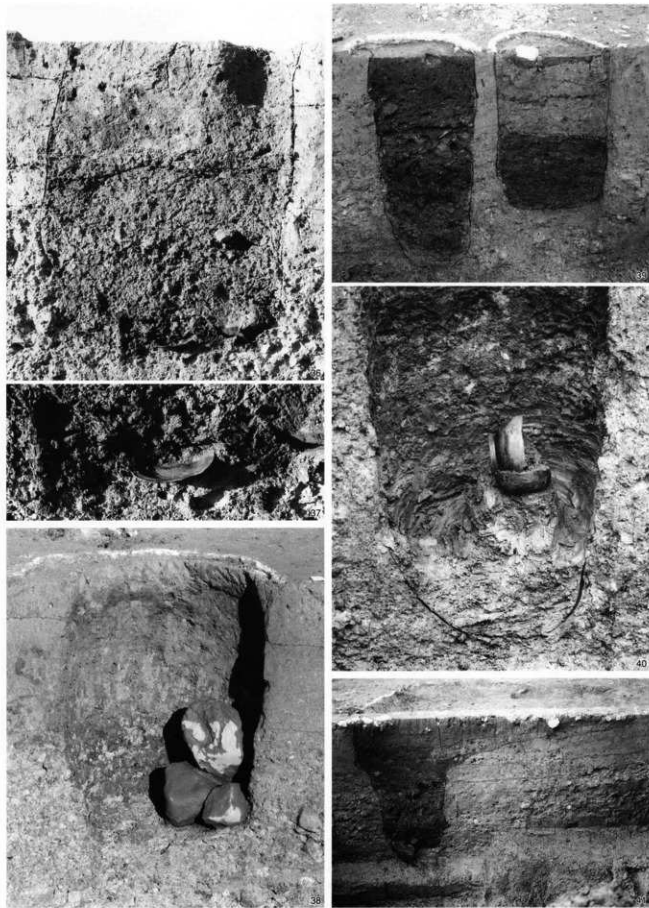
图版7 14.SK01 15.SK05 16.SK07 17.旧河道 18.SP 35 19.SP81 20.SP102 21.SP110 · 111



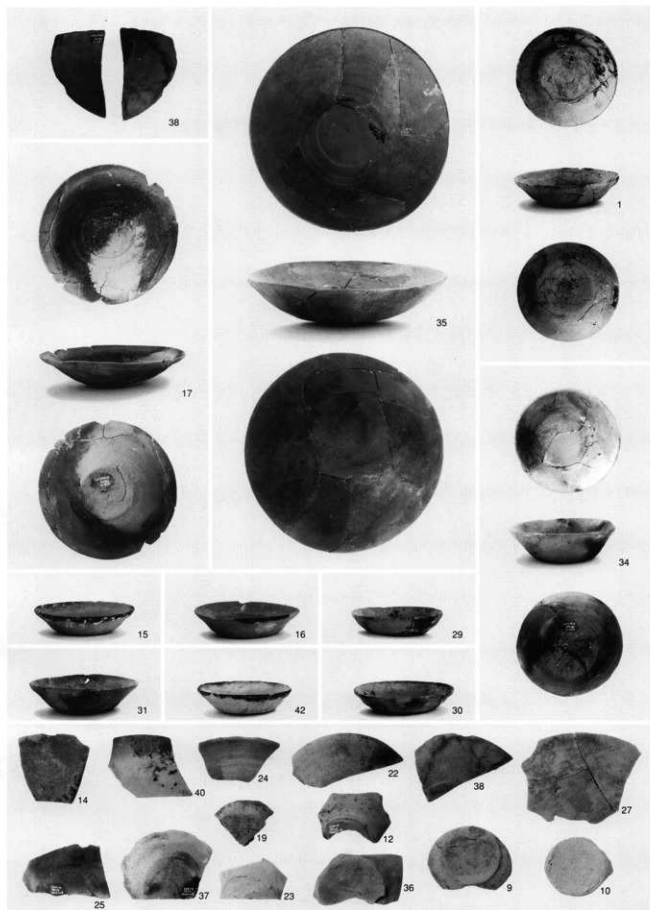
图版8 22.SP41 23.SP24 24.SP89·90 25.SP37 26.SP 112 27.SP101 28.SP83 29.SP124



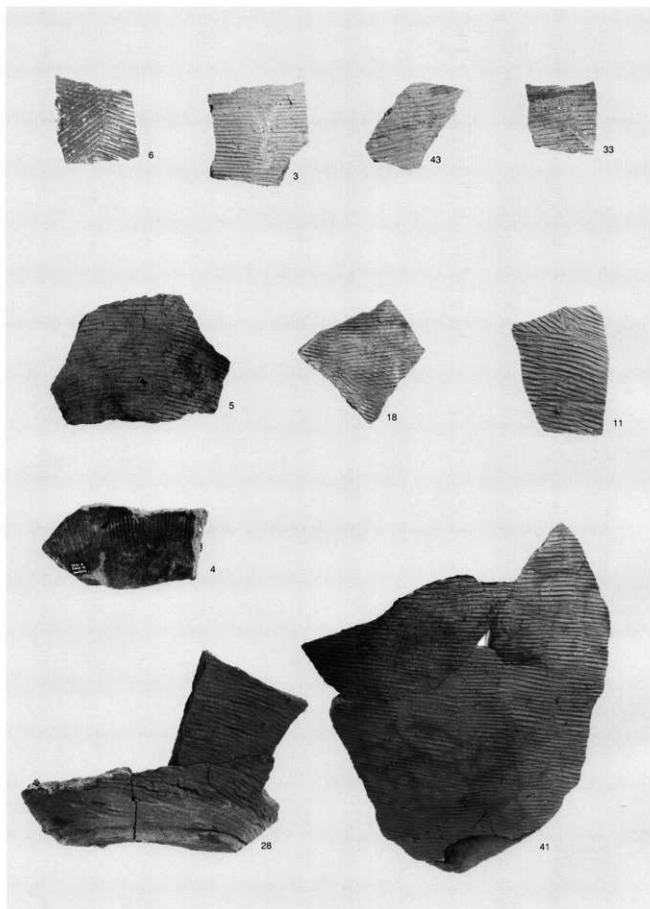
図版9 30・31・32.SE06 33.SE07~10 34.SE09 35.SE09漆碗出土状況



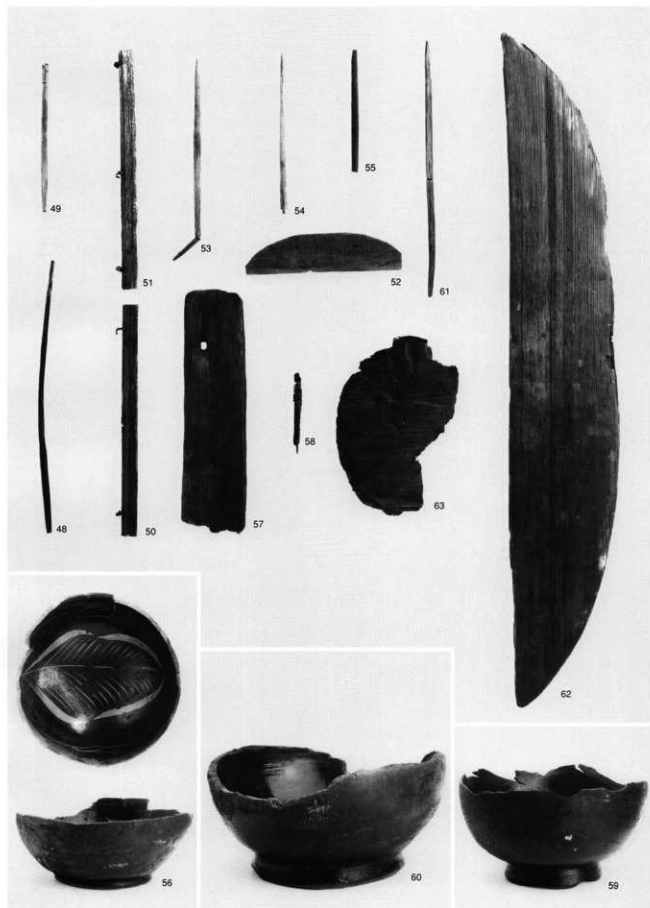
図版10 36・37・38.SE07 39.SE14・15 40.SE14漆椀出土状況 41.SE17とSK03の切り合い



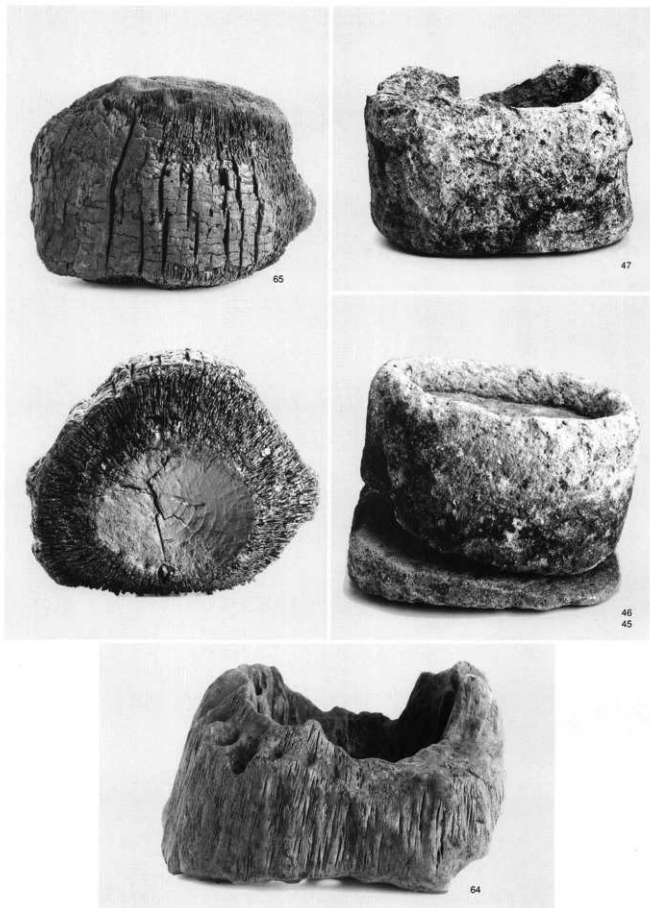
图版11 出土遺物(1)



图版12 出土遺物(2)



图版13 出土遺物(3)



图版14 出土遺物(4)

報告書抄録

ふりがな	とやまけん いのくちむら いのくちAいせき はっくつちょうさほうこく							
書名	富山県井口村井口A遺跡発掘調査報告							
編著者名	高梨 清志・野原 人輔							
編集機関	富山県埋蔵文化センター							
所在地	〒930-0115 富山市茶屋町206-3							
発行機関	井口村教育委員会							
所在地	〒939-1888 富山県東砺波郡井口村蛇喰26							
発行年月日	西暦2002年3月29日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いのくちA 井口A	とやまけん いのくちむら いのくちむら じゃばみ 富山県東砺波郡井口村蛇喰	16407	407005	36° 92' 48"	136° 59' 00"	平成13年 9月18日 ～11月12日	1,200m ²	ほ場整備
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
井口A遺跡	集落	中世 近世		井戸・溝・土杭・ 小穴・自然河道 —		中世土師器・珠洲・ 瀬戸美濃・石製品・ 木製品 越中瀬戸・伊万里		井口を多数検出

富山県井口村

井口村井口A遺跡発掘調査報告

発行日 平成14年3月29日

発行 井口村教育委員会

〒939-1874

富山県東砺波郡井口村蛇喰26

TEL 0763-64-2506

編集 富山県埋蔵文化財センター

印刷 有限会社 明和印刷